百々裏話（87）

おもてあきら

◎観世一学のこと

雑誌『観世』の昨年十二月号に〃元章歿後の家督相続をめぐって〃と題する小論を発表し、その中で、明和・安永の頃にしばしば観世大夫元章のツレを勤めている観世一学なる人物について考証を試みた。主眼は、観世大夫家の系譜として著名な『観世累葉家譜』が元章の子の「喜久」（実は「喜夕」らしい）に「同男　観世一学　後日吉市十郎」と注し、一学を元章の子としているのが誤りであることの論証であったが、ついでに、彼の事績・素姓についても考証・推測を加えておいた。

然るに、最近、一学の素姓についての私の推測を否定するのみならず、彼の事績について多くの新事実を教えてくれる好資料が存在することを知った。それは、観世宗家所蔵の『観世流謡学掲的』と題する写本一冊（原本ではなくて転写本らしい）である。同書は、系譜史料としてよりは明和前後の謡の実態を伝える点が貴重な謡伝書であるが、さしあたり、観世一学の伝記史料としての側面のみを紹介しておこう。まず、同書の序に左の如くある。（注記は上欄空白への追記を移したもの）

夫、余ガ師ニ随従スルヤ、江戸ニ二年有半、京ニ五月、マコトニ居諸僅々タリ。然レドモ、口授面命ヲ受ルコト少也トセズ、書音ヲ通シテ伝ヘ受ル者モ亦オホシ。……（以下、師説をまとめて一書に編む由を言う）

抑、師ハ、若シテ貞光氏ニシテ、貞之丞ト字ス。少々ノトキ左近大夫元章養テ子ノ如クシ、家芸ヲ教導スルコト特ニ厳密也。長トナルニ及テ更ニ服部一学ト称シ、元ノ一字ヲアタヘテ元侍ト名ノラシメ、女ヲ以テ娶シ（妻元章ノ女タリシハ先ニ死セリ）、教導ノ厳イヨ〳〵隆ン也。盍シ遂ニ子トシ宗事ヲ承サセントノ意也。コノ意イマダ達セズシテ元章病ニカカツテ下世ス。ココニ於テ、師父トスル所ヲウシナヒ、定止ニ迷フ。時ニ倖縁アツテ日吉ノ家嗣トナリ、日吉市十郎ト改称ス。爾リシヨリコノカタ、観世一座ノ楽頭タリ（織部大夫消息ニ関寺ヲ伝ルナド、楽頭タルコト知ベシ）。老大ニシテ退隠シ、自ラ井尻一学ト称シ（井尻ハ師ノ本国丹州ノ地名、一学ハ元章ニ養ハレシトキノ旧称）、イヨイヨ深ク道ヲタノシメリ……（中略）

爾ルニ何事ゾ、一朝訃イタリ告テ日、師恙アツテ患ヘ、薬餌効ヲ奏セズ、享齢七十有七歳ニシテ歿シヌ。実ニ文政六年癸未四月十三日巳牌也。敬信院法光日照信士ト号スト。余悩然トシテ驚カツ愁フ。誰カ悲マザルベケン。誰カ惜マザルベケン。良久シテツラ〳〵往事ヲ追想……（以下、書名の由来などあり）

文政八年乙酉長至日　　後学　春鳥斉東湖散人　自序

これによると、『観世流謡学掲的』は文政八年の編で、春鳥斉東湖散人なる人が編者であるが、本文によると、編者は若狭小浜藩の人で、片山姓であったらしい。そして編者が敬慕した師が服部一学、後の日吉市十郎であった。ここに言う服部一学が即ち私の問題にした観世一学であることは、観世家が本姓服部を称し、十六世章学が隠居後に服部惣左衛門と名乗った例を初め、服部姓が観世姓と同様に用いられていた一事からも明らかであろう。服部一学が文政六年（一八二三）77歳歿と言う点も、延享四年（一七四七）生れとなり、元章が『雲上散楽会宴』の中で明和九年（一七七二）の仙洞能に出勤した一学について、

観世一学長枝　二拾六歳

と注している年齢書と合致する。元章は名を「長枝」と記し、右の序には「元侍」とする点は合わないが、これはどちらかが後に改めた名と解される。服部一学が観世一学と同人である事は間違いあるまい。

一学が貞光氏の出自で、幼名を貞之丞と称し、早くから観世大夫元章の猶子的存在であ

ったと言う点が、右の序から知られる第一の新事実である。元章の養嗣子となったツレ方観世家の章学の弟ではないかと推測した『観世』拙論は、訂正せざるを得ない。貞光氏と言えば、金剛座笛方の貞光家がまず念頭に浮かぶ。元章当時は貞光小八郎政武が活躍しており、一学が生れた延享四年には34歳であった。一学が小八郎の子である場合が想像される。但し、金剛座笛方の貞光家と観世大夫家が当時親密であった形跡は見えない。一方、元章編らしい『将軍宣下能目録』(服部康治氏蔵)によると、宝暦十年(一七六〇)の家治将軍宣下能の第四日目、観世織部清尚がシテの烏帽子折に出演した諸役(ツレ・子方・立衆)十一名の最初に「貞光八三郎」の名が見える。最初に書かれているのは子方か女ツレであろう。ツレならばかなりの年配者になるから、当時の観世座に貞光姓の人がいた事になり、一学がその家の出自である場合も考えられてくる。子方ならば、当時14歳になっていた一学の初名が「貞光八三郎」であったとも考え得る。一学が「貞之丞」と称した事は、『観世流謡学掲的』の本文に元章から稽古を受けた際に貞之丞鞭と名付けた弓折れでしごかれた話も見えていて確かであるが、それ以前に八三郎と称していた事もあり得よう。「八三郎」が笛方の貞光小八郎の名に類似する点や、役者付の類を検しても観世座に貞光姓の家が所属した形跡が見えない事などを考え合わせると、一学は笛方貞光家の出自であった可能性が強いのではなかろうか。

一学の妻が元章の女であったと言う点も、新事実である。『観世累葉家譜』は元章の子に一学と結婚した女を掲出していないが、脱漏の多い同書のことゆえ、不備と見なしてよいであろう。元章の女と結婚した事が観世姓を許された契機かも知れないが、私が調査した範囲での「観世一学」の名の初出である明和五年には、彼は22歳である。結婚していて不思議のない年齢と言えよう。

元章が一学を自己の後継者にしようと考えていたと言う点は、編者の推測の形で述べられている事でもあり、真偽のほどは明らかでない。可能性があるとすれば、養嗣子の章学が病気のため活動しなくなった明和九年以後のことであろう。同年の西下や仙洞御所での能に一学を伴なうなど、元章の一学引き立てはかなり顕著であるから、周囲の人々が一学を後継者視しただけなのかも知れないし、元章にそのつもりがあったのかも知れない。

安永三年(一七七四)に元章が歿した後、縁あって日吉家を嗣ぎ、一学から日吉市十郎に改めたと言う点は、『観世累葉家譜』の説ともつながり、別人であろうとする私の推測を覆えすものである。安永六年以降観世一学が「小林一学」と改めている事実(『観世』参照)について『観世流謡学掲的』は何も言っていないが、小林一学時代が「定止ニ迷フ」と記された頃で、その後(天明三年以前)に日吉市十郎と改め、正式の観世座の一員となったのであろう。日吉市十郎がかなりの名手であったことは、他書にも証跡が得られる。「観世一座ノ楽頭タリ」の表現は少しオーバーであるが、十八世清充、十九世清興時代の市十郎が観世座の重鎮であった事は間違いない。大夫名代の形でしばしば西下したようで、京観世浅野家の一門が文化五年に観世宗家に入門したのも日吉市十郎の斡旋によっている。

老後に「井尻一学」と名乗ったと言う事も新事実である。時期が不明で、文化十三(一八一六)年の観世大夫清暘の勧進能で数番のシテを勤めた日吉市十郎が一学かその後嗣かも知り難い。一学は当時70歳であり、隠居して井尻姓を称していたのではなかろうか。

歿年月日や法名が明らかになった点も有難い。その他、老後に将軍の御前で盛久の仕舞を舞った事、本願寺の能で好評を得た事、元章にしごかれた事、弟子の事など、観世一学について『観世流謡学掲的』が教えてくれる点が多々あるが、私説の訂正・補充に役立つ点をまず紹介しておいた。(46・12・3)